

青い鳥を求めて

—ノーベル賞、ベルギー語、ベルギー文学

ヨース・ジョエル

一 ノーベル賞をもとめて

契りおきし させもが露を 命にて あはれことしの 秋もいぬめり

この歌をご存知の方は多いかと思う。もともとの出典は『千載集』（巻十六・雑歌上）であるが、『小倉百人一首』にも含まれている。藤原基俊という、あの藤原道長の曾孫にあたる人物による歌である。手元にある解説書に「性格は驕慢で」「官位は従五位下左衛門佐でおわり」とあり、「わが子の光栄をひたすらねがう親心」がうかがえる作品であるとされている。一種の恨み節ともいえる。¹

古より、秋の日々は天候が良く様々な作物の収穫が豊富で、人々の心に余裕をもたらす季節である。現代社会においても、秋の陽気は人々を文化活動へといざなう。言うまでもないが、毎年のように、ノーベル文学賞の受賞者が発表される時期でもある。2016年に、例年通りの小説家や詩人ではなく、フォークソング歌手の Bob Dylan が賞を受けるという驚くべき事態が発生し、本人の所在不明と沈黙やら授賞式への不参加やら、一連の騒ぎは記憶に新しい。それに比べて、2017年のノーベル文学賞発表は、それほど大きな反響がなく、「正統」な選択でさえあった。むろん、正統とは、つまらないという意味ではない。二つの文化的背景を持ち合わせている小説家のイシグロ・カズオが選ばれたのは、グローバルな時代にふさわしい人選であったといえよう。一国だけにルーツを持つのではなく、また、一つの文化的背景だけで語りえない著者である。やっと物心がついたところに両親とともに日本を離れ、その後の人生を英国で過ごしたイシグロ氏の作家活動において、「Britain」の存在がはるかに大きな比重を占めているのは事実だが、両親の教育や、人の感性や世界観を無意識のうちに大きく左右する様々な原体験を考慮すれば、「Japan」も度外視してはならない存在であったに違いない。日本にとって三度目のノーベル文学賞にはならなかったが、「二度二分」目の「日本人受賞」といってよさそうである。

それでも、この発表とその後の報道を藤原基俊にも似た気持ちで見守った人々は多かったのではないか。本人はわからないが日本人が待ちに待っているのは、

というより、日本のメディアが首を長くして望んでいるのは、村上春樹の受賞発表である。その期待の前線は秋雨とともに列島を襲い、そして、ここ十数年来、西日本でも紅葉が赤く染まりはじめ行楽季節が全盛期を迎えないうちに、過ぎ去っていく。つまり、世界的なヒット作を次々と生み出し、筆者の母国ベルギーでも根強い人気を誇るような「グローバル作家」である村上は、毎年のように受賞候補と有力視されるが、そのたび、賞を逃すのである。「ことしの秋もいぬめり」と語んじる人はすくないはずだが、ある新聞にあった、『今年もなかったな…』というのが季語になりつつある」という観察はうなずけるのではないか。しかも、今回の発表はさらに後味が苦い。皮肉なことに、イシグロの栄光は、「ムラカミ」という、同じ「日本の」作家の受賞確率をうんと下げてしまったのではないか。内心そのような怨念をいだくハルキストがいないとは限らない。憾むか否かはともかくも「させもがつゆ」の祈願の成就がさらに遠ざかってしまったとみても間違いはなさそうだ。

「ムラカミ」「日本の」— 意図的に片仮名で、また鍵括弧を付して書いた。それは、彼の文学が世界的に愛読されている理由が、日本的であるからではない、と思うからである。むしろ、日本という独特な文化的背景に縛られない度合いに応じて世界の読者たちをひきつけている。彼の作品において、日本という文脈、言語、伝統が生み出した感性がどれほどの比重を占めているか、それは議論の余地がありそうだが、極端に言えば、イシグロ同様、その比重はそれほど大きくない、ともいえる。万が一、村上春樹がノーベル賞をとっても、それは、日本の「二度五分」目の賞にすぎないという人もいるかもしれない。

少し視点を変えよう。ボブ・ディランに賞が贈られるような時代において、「日本の」受賞を喜ぶのはどれほど意味があるのか。国内のメディアと書店はどうであれ、ノーベル文学賞の授与が文化的言語的帰属性の「純粋度」を基準にしているのでないことだけは明らかである。まして、文学を「国家」という範疇と結びつけ、政治的に利用されるのを良とする時代は疾うに終わった。たとえば、2010年と2012年に、ノーベル文学賞が中国人作家へ授与されたが、2010年に反体制派の作家、その二年後には国家体制との距離が近いとされる作家が選ばれたのである。² 日本の場合、川端康成の受賞（1968年）は、まぎれもなく、彼の作品の「日本らしさ」が大きな決め手となった一方、大江健三郎のそれ（1994年）は、むしろその普遍的なテーマを扱ったところが評価されたことによる。いずれにしても、もしも「一国として」文学賞の受賞を待ち望んだり、受賞番つけでもつくったりするような輩がいれば、その時代錯誤も甚だしいと、嘲笑に付するほかはない。

同時に、文学とは言語を介してしか成立しない。そして、言語は政治体制から見れば中立的な道具ではない。文学と言語、言語と国家、文学と国家は切ろうにも切り離せない。どの言葉に書かれているか、どのほかの言語に訳されているかは、世界的注目度の大きな要因となる。大きな国、大きな言語はやや有利であろう。しかし、国力と文学との関係には様々な模様があり、それはけっして単純なものではない。「国」と「文学」との関係に、歴史以前あるいは以上の、超越的な根拠があるわけではなく、その関係は一定ではない。

「印刷資本主義」の台頭が愛国心・国民意識の形成とどのように関連するかを論じたB.アンダーソンの研究は、一世を風靡したと言っても過言ではない。『想像された共同体』のなかで、一例として、フィリピンの国民意識形成において、リサールの小説『ノリ・メ・タンゲレ』(1887年)がどれほど大きな役割を果たしたかを解明しているが、『Under Three Flags』という著作でも、不思議な現象に照明を当てている。つまり、『ノリ・メ・タンゲレ』や『エル・フィリプステリスモ』(1891年)という小説は、無数の島からなるフィリピン列島で通じる唯一の共通語であった、宗主国の言葉＝スペイン語で書かれている。前者のタガログ語訳が現れたのは、20年過ぎてからであり、英語訳と仏語訳が出版されるよりも後のことである。³そして、何よりも考え深いのは、そのタガログ語の翻訳本が、またも多くフィリピン人に読めなかったという逆説である。無数の島からなるフィリピンは、いまなお多言語国家としての在り方を模索している。リサールはというと、マニラのスペイン総督府の逆鱗に触れノーベル賞を授与されるどころか、1896年に処刑された。そのまま歴史小説にできる、波乱に満ちた生涯である。だが、ここで覚えていただきたいのは、フィリピンだけでなく、多くの国で文学を取り巻く政治情勢が複雑であることであり、言語と国家と文学の関係はけっして一律ではないことである。そのように「単一」のように見える国では、わずかな例外を除いて、近代国家の領土に含まれる少数言語への軽視あるいは積極的な消滅作戦が行われた。日本における琉球語の行方は、この列島でもそのような悲しい歴史があることを物語っている。

国あるいは地域によって、自らの母国語以外の言葉に日常的に触れ、その言葉を使って文学作品を生み出すことは、それほど珍しくない。小国や中央権力から離れた周縁地域＝境界地帯なら、家庭と初等教育の言葉と、高等教育のそれが異なることは不本意ながらも普段の生活の中の現実である。むろん、すべてが「被害・加害」の関係に尽きるというわけではない。才能とすぐれた言語感覚を持ち合わせた「知能移民」が異国から移住し、移住先の文化を徹底的に吸収し、母国語話者と異なる感性を駆使して様々な作品をしたための例は、日本をふくめて世界のあちらこちらで見受けられる。1928年にフランスで生まれたレイモン・フ

エダマン氏は、19歳の時にアメリカに渡り、英語とフランス語の二か国語で文学活動を展開し、バファロー大学で教鞭を執るようになった。日本では、1994年に、アレックス・カーが『美しき日本の残像』⁴で新潮学芸賞を授与され、また、2008年に楊逸が芥川賞に選ばれた。2008年にフランスでもっとも権威ある文学賞（ゴンクール賞）を贈られたのは、20歳を過ぎてからアフガニスタン難民としてフランスに渡ったラヒミ氏である。⁵

上の例は、その国の主要言語に合わせるような場合であるが、それとは別に、多言語国家の状況も気になる。最初から多言語国家にうまれた文学者なら、二つの異なる言語を自らのうちに有しそのどちらをも使いこなせ、国外の賞に与ることがあるのだろうか。上の例を考慮すると、十分考えられる。

日本ほど「多言語国家」から遠い国もめずらしいと思う人がいるかもしれないが、そうでもない。近代以降の言語政策はさておいて、21世紀に至っては、英語を併記した標識や案内板などがあちらこちらで増えている。⁶ 車内放送が日本語のほかに、英語、中国語、韓国語とポルトガル語でなされる名古屋地下鉄のような、局地的な「多言語的空間」は、これから増える一方であろう。全体的に多言語国家とはまだ言えないが、全国津々浦々に電波が届く主流の報道機関でも「バイリンガル」という言葉をしきりに耳にするようになった昨今である。

国によって「バイリンガル」が特別視されるどころか、三つ以上の言語を自由自在に使える人が珍しくない地域もある。だが、しかし、である。同時に二言語を習得し、そのどちらでも文学活動に挑むことは、多言語国家の市民とはいえ、至難の業である。両方の言葉を完璧に操るという「バイリンガル」—それは一種の神話である。しかも、流ちょうさを手に入れることはできても、時間の不遑及性に逆らうことはできない。どの言葉で何をして過ごしたかによって、どちらかの言語が優勢になる。初恋は一回しかできない。その相手がアメリカ人であったなら、時間を止めて、その経験を日本語で繰り返すことはできない。二つの言語の間に常に均衡を保ちながら人生のあらゆる場面を乗り越えていくことは、不可能に近い。

また、巨視的に見ても、一人の人間のなかで生じざるをえない言語の不均衡は、一つの社会の中でも、政治や経済の動向によって生じやすい。カナダのケベック州のように、フランス語の利用を強要する「言語警察」のような統制機関でもこしらえない限り、不均衡の是正はむずかしい。⁷ 多言語国家の作家たちは、どれか一つの言語で主な活動を展開している場合がほとんどである。

ノーベル文学賞への思い入りはつよい。それは、わたしの出身地ベルギー北部

でも、そうである。かつて、オランダ語で数々の作品を世に問い外国語に訳されることも多かったフゴ・クラウス氏が賞に授かるのではないかと毎年のように新聞や放送局の記者たちが騒いでいた。⁸

では、多言語国家ベルギーがどのような歴史を経てベルギー独自の文学が生み出されたか。ノーベル賞が象徴する国際的な賞賛を得るようなことがあったのだろうか。ここでは、ベルギーという国の言語、文学、について少し触れてみたい。

二 ベルギー人はいるが、ベルギー語がない

まずは、ベルギーという国の言語事情について簡単に紹介しよう。多言語国家のつながりでベルギーを紹介するのであるから、すでに予感があった人も多いだろうが、「ベルギー語」という言語はない。北はオランダ、南はフランス、東はドイツに囲まれたベルギーは、1830年の独立当初から複雑な言語事情を抱えている。ベルギーにおけるドイツ語は、第一次世界大戦後のドイツ語地域の併合によって公用語の一つに含まれるようになったが、その人口は高知市の三分の一程度であり、その面積は高知市の3倍程度である。ドイツ語話者が多数を占める地域の面積にしても人口にしても国土のほんの一部分にすぎないため、ここではくわしく触れない。問題は、北部のフランダースと南部のワロニアである。前者はオランダに接してオランダ語がつかわれる地域であり、後者はフランスに接してフランス語がつかわれる地域である。その二つの地域が一つの国になった経緯は少々入り組んでいてここで委曲を尽くして解明する場所がないが、いくつかの点をあげて整理しておきたい。

- ① ベルギーが独立する前は、それぞれの地域は長い間オーストリア領であったり、またフランス領であったりして、公用語に関して自己決定をする余地がなく、北部でもオランダ語が公用語として発展することがなかった。オランダ語地域では、知識階級もフランス語を使いフランス革命の勃発、ナポレオン・ボナパルテによる征服はその傾向を一層強めた
- ② 独立する前の15年間だけ、ベルギーがオランダ王国に組み込まれた。オランダ語を公用語として押し通そうとするオランダ国王は、フランス語をつかう上層階級の理解を得ず、オランダの支配に対して反乱がおこり、ベルギーが独立するにいたった
- ③ 独立当時、欧州全体におけるフランス語の地位もたかく、また、南部地域がいち早く産業革命をとげ経済力で優つ

ていたこともあったため、ベルギーは「一国一文化一言語」の旗印のもとで、フランス語が公用語の国家として国際舞台に躍り出た ④ 北部は依然として発展が遅れていたが、オランダ統治の時代に施されたオランダ語教育は北部の中流階級に刺激を与え、その一部がみずからの言語的アイデンティティをフランス語ではなく、庶民と共有するオランダ語に見いだしはじめた ⑤ 19世紀後半からオランダ語をフランス語と対等な公用語として認めてもらう運動が芽生え、北部＝フランダースの独立を掲げる人々も現れ始める ⑥ 20世紀初頭、オランダ語の地位改善の兆しもなくベルギーが第一次世界大戦に巻き添えになるが、ドイツ占領軍が（同じゲルマン系であるとして）オランダ語の優遇策を施行し南北対立を利用しようとする。戦後、占領軍と協力した独立運動家たちは罰せられるが、⑦ 1930年代からオランダ語が公用語として認められ、多言語国家への大きな一歩が踏まれる。⑧ 第二次世界大戦後、一次大戦同様、ドイツ軍との協力への処罰がベルギーにおけるオランダ語の地位向上にふたたび水を差す結果となるが、1960年代後半から、オランダ語圏の経済発展にともない教育や政治などの分野において「脱仏語・脱ベルギー」の志向が強まり、徹底的な地域分権が遂げられる。⁹

これはあくまでも概要であり不十分であるが、多言語国家の誕生や成長がどれほどの苦労を伴ったかがうかがえる俯瞰ではなかろうか。一見する限り、占領や分権など、常に歴史の荒波に揉まれる、文学どころでない。日本の国土の十二分の一に満たない面積を有する小国が二つの言語圏に分かれたり、摩擦や反目をくりかえしたりする環境では、世界に名をとどろかす文学の生まれる余地があるはずもない、と思う人もいるかもしれない。しかし、それは、誤認である。誤認ではあるが、まったく荒唐無稽な推論ではない。

というのは、たしかに不利な点があると認めなければいけないからである。たとえば、印刷資本主義の発展と文学市場の成立という観点からすれば、ベルギー国内のオランダ語圏（人口：六百万人）とフランス語圏（人口：400万人）が形成する市場は小さく、経済力ある出版社が育ちにくい。すくなくとも、北のオランダ（人口：1,600万人）、南のフランス（人口：6,000万人[フランス以外の仏語話者を入れると、さらに多い]）のそれに対抗できずその陰に隠れてしまう。よって、国際的に注目され翻訳されるような作家を国内で育てるのはむずかしい。ベルギーという近代国家に付随する「ベルギー語」という国語がない国の運命ともいえる。ベルギーという国の統一を推進し、地方分権の行き過ぎを懸念する政治家や作家も、かならずどちらかの地域のメディアで発信するほかに方法

がないという事情は、なんともしがたい。狭いうえに、袋小路のような、迷路のような状況ではないか、と外国のメディアでもよく言われる次第である。

三 モーリス・マーテルリンクと言語

ただし、このような見方は、それじたい狭く、小国ならではの柔軟性と多様性を過小評価している。というのは、隣国の大きな出版社に注目されさえすれば、一気に大きな舞台へあがる道も開かれているし、「ベルギー」という希少性＝付加価値も売り物にできる。実際に成功した文豪たちの功績を追っていくと、小国の出身であることがかならずしもハンディーではなかったことが分かる。とくにフランス語をつかう作家たちはパリからの熱い視線をばねに世界的に活躍するようになる例はすくなくない。そのもっとも有名な例は、ジョルジュ・シメノンである。ベルギー南部のリエージュ市生まれであるが、17歳からフランスへ移住し頭角を現す。シメノンは、ドイツのシャーロック・ホームズとクリスティの（ベルギー人という設定になっている）エルキュール・ポワロという名探偵たちと肩を並べる、個性派「警視」の原型であるメグレをつくりあげた。彼の本は、世界的に五億冊も売れたとされるが、ベルギーが舞台になることがあっても、主なテーマになることはなかった。父も母もベルギー北部の家系であるが、そのようなことは彼の数多くの小説のなかで、けっして主なテーマにはならない。量産という点でも世界的な作家であったが、あくまでもフランス語というブリズムを通して世界を見ているのであった。¹⁰

シメノンは、しかし、推理小説など、文学として高く評価されない本がおおく、大きな文学賞にあずかることなく一九八九年に最期を迎える。ここで、もう一人、1911年にノーベル文学賞を受賞したベルギー人作家のことを紹介したい。

筆者と同郷であるモーリス・マーテルリンクは、1862年（西周や津田真道らが隣のオランダに留学していた年に）、ゲントで生まれた。1949年、つまり第二次世界大戦が終結して4年後に、長い生涯を閉じる。ゲントは、いまでも多くの観光客が訪れている、中世から栄えた古都である。ゲント市民のあだ名は“strop”（本来：「絞首刑用の縄」）である。それは、16世紀にカール五世（ゲント生まれのスペイン王）の支配にあらがった市長と市議員たちが、警告と見せしめの意を込めて絞首刑用の縄を首にかけたまま市中歩かせられた事件に由来する。その後、容易に服従しない気骨の証しとなる。実に、豊富で長い歴史をもち、アントワープとブリュージュと肩を並べる、誇り高い都市であるが、近代的な顔も持っている。19世紀に、イギリスから新技術を輸入してベルギー北部でいち早く繊維工

場が建てられ生産が始まったのもゲントである。上の①～④でも触れたように、産業の発展をリードしていく市民階級の使用言語は、しかし、オランダ語ではなくフランス語であった。欧州の貴族たちの共通語であるだけでなく、フランス革命の最先端の思想の媒体言語でもあるフランス語は、政治や哲学などはもちろん、文学面でも、オランダ語を大きく上回る存在感を示し、ベルギーの高等教育の唯一の使用言語であった。雇人への指図など、庶民との遣り取りをのぞけば、ゲントの上流階級のおおくはフランス語しか使わない社会生活を送っていた。ゲントでベルギー初の「オランダ語系国立大学」が創立されたのは、ベルギーが独立して百年経った1930年ごろである。言うまでもないが、その70年前にゲントの裕福な家庭で生まれたマーテルリンクはどっぷりとフランス語の世界に浸り、その作品も例外なくフランス語で書かれている。

彼の作品は、芝居や詩がおおく、彼がのこした数少ない小説より存在感がある。明治時代になると、フランスが日本で芸術の本場としてもてはやされるようになるが、明治後期からマーテルリンクが脚本を手掛けた芝居が上演されることもあった。『ペレアスとメリザンド』のような、哀愁漂う雰囲気に満ちた作品は、フォーレやシベリウスのような作曲家を魅了したり、デビュッシー作のオペラの題材にもなったりするほど、欧州の芸術家たちに少なからぬ影響を及ぼしたが、その中でもっとも有名な作品は、まぎれもなく、『L'oiseau bleu』（青い鳥）（1908年）である。モスクワで初演され、ニューヨークなどでも人気を博したこの作品は、一種の童話でもある。ミチルとチルチルという兄弟が、＜幸福の青い鳥＞を求めて家を出る、主人公である子供の成長を描く物語である。家を出て森に迷いこむ兄弟は色々な出会いを果たすが、青い鳥をみつけることができない。手に入れるのは、しかし、もっと大きな宝である。それは、金銭的裕福は心の幸福につながるという教訓であり、また、家で飼っている鳥（青い鳥…）を貧乏な少年に渡した時の、＜与える喜び＞と幸せである。そして、その幸せはずっと自分のうちにあったと知る。まさに、童話のような展開であるが、大人をも魅了してやまない、じつに深い物語である。かつてタクシーなどにもよく使われていた日産自動車産のセダンを＜ブルーバード＞と名づけたのは「幸せを求めて遠くへ出かけるが、最後は家に帰って幸せを見つける」という発想がもとになっていると推測される。¹¹

『青い鳥』はマーテルリンクの出世作であっても、もちろん、その最初の作品ではない。彼の作品は、以前から日本の文学界で紹介された。『通俗世界文学』（明治36年）に「マアテルリンク物語」を書いたのが正宗白鳥であり、『神秘論』（明治39年）の訳もあった。ただし、『青い鳥』の内容はとくに日本人の感性に合ったようである。島田元麿が『青い鳥』を訳した（明治44年）のを皮切りに、

戦前だけで、菊池寛をふくめて8人の訳者によって和訳されている。一躍注目される作家になったようである。¹³

マーテルリンクの生涯は、しかし、順風満帆ではなかった。世紀末から主にパリで活躍し、1911年のノーベル文学賞受賞後は特に、「俗世を超越した聖人」のような地位を得るが、歴史の荒波にもまれ、容赦なく俗世に引き戻された。つまり、1914年にフランスに侵攻しフランス北部でフランス軍に凄惨な消耗戦を強い続けたドイツに対して、激しい反独言論運動を展開した。それによって超越した作家としての輝きが薄れる。第一次世界大戦が終わると、アメリカに招待されるが、その人気に影がさしはじめた。マーテルリンクがふたたび注目を浴びるのは、その数年後の1926年前後である。その注目は、しかし、あながちポジティブなものではなかった。わかりやすくして流麗な文体で昆虫の生態、とくにその高度な社会性を紹介するというめずらしい切り口の著書『ミツバチの生活』『白蟻の生活』などを次々と発表し読者たちの興味を引いたのは良かったが、しばらくすると、盗作疑惑がもちあがる。それが解決されないまま、第二次世界大戦の勃発をむかえ、アメリカに亡命する。終戦後、ふたたび南仏のニースに居を移し、国際ペンクラブの会長などを経て、1949年に生涯を閉じる。

『青い鳥』の著者がノーベル賞を受賞したことはともかく、盗作の疑惑をかけられていたことを知る日本人はどれほどいるのだろうか。盗作の被害者は、南アフリカの雑誌でシロアリについて発表していたマレー氏である。マーテルリンクが彼の文章を無断に模倣したと訴えるが、一方のマーテルリンクは彼を相手にせず、作品は自らの研究と想像の産物であると言い続ける。両方の文章を比較する機会がないので、盗作の有無についてここで断定することは難しいが、その根拠を、上述した言語事情に照らしてすこし説明したい。

当時の南アフリカはすでに大英帝国の中に編み込まれて久しいが、もともとネーデルランデン（今のオランダとベルギー北部）から喜望峰に移り住みさらに北へ移動しつづけた南アフリカの白人たちが日常生活で使う言葉は、2世紀ほど前のオランダ語から独特な進化をとげた<アフリカーンス語>である。（ちなみに、2003年にノーベル賞を受賞した南ア出身のクツェは、親戚とアフリカーンス語で話す一方、小説を英語で書いている。）実は、オランダ語とアフリカーンス語は、20世紀まで同一言語とみなされ、文法はもちろん、語彙も9割程度重複している。盗作疑惑のポイントの一つは、そこにある。つまり、アフリカーンス語で書かれた文章をマーテルリンクが読んで理解できたかということである。具体的に言えば、南アフリカ人のマレーによる原著を無断で模倣することが出来た

のは、アフリカーンス語とオランダ語がよく似ていて、翻訳が容易に出来たからとされている。盗作というより、「盗訳」と言った方が正確なのかもしれない。

あらためて指摘するまでもないが、不思議なのは、マーテルリンクがフランス語でしか執筆活動していないことである。それは、一見する限り、オランダ語地域にあるゲントで生まれ育った文学者にとって、余計な迂回路であるように見えるが、当時のベルギーではけっして珍しくない。同時代に活躍し、ノーベル文学賞の候補者として何度もノミネートされつつマーテルリンクに先越されたエミール・ヴェルハーレン（1855年うまれ）という詩人は、同じく、オランダ語地域の出身であるが、その中等以上の教育はすべてフランス語で行われ、その文学作品もすべてフランスで書かれている。数多くの演劇の脚本や詩を執筆し、パリに移住、アンドレ・ジードやシュテファン・ツヴァイクの文豪たちと交流をするが、それはフランス語という、普遍性ある言語のために得た情報網であるとも言える。ヴェルハーレンも第一次大戦の勃発後反独の活動を開始し、イギリスに亡命するが、2年後、フランスのルーアンで、列車事故（轢死）で亡くなる。

しかし、彼はけっしてフランス人ではない。その感性は、花の都であると同時に啓蒙思想と合理主義の人間観の総本山でもあるパリのそれと違い、目に見える現実のうらに、同じぐらい重要な、いやむしろ、目に見えない、もっと重要な現実がよこたわっているという認識の上で成りたっている。後々シュールレアリズム（超現実主義）へとつながるシンボリズム（象徴主義）こそ、ベルギーが19世紀から生み出した数々の芸術や文学の基底にある世界観であるが、その主な媒体はフランス語である。

マーテルリンクはオランダ語を理解することが出来、小説や芝居を書くときに、（実生活ではオランダ語の方言を話す）ゲント庶民の姿もしばしば登場するが、けっしてオランダ語の文学を生み出すことがなかった。21世紀となってマイノリティーという言葉をよく耳にする。それは、マジョリティーに迫害される対象として認識されやすいが、言語的マイノリティーがその社会において高い地位を得ることも世界の歴史でしばしばみられる現象である。しかし、20世紀後半には、このフランス語を話すマイノリティーはベルギー北部の表舞台からその端へ追い遣られる。現在、ベルギー北部＝オランダ語圏＝フラーンデレンからは、フランス語で小説を書く作家が出てくる可能性は極めて低くなった。ベルギー国家がオランダ語圏の市民の権利（裁判や高等教育などを自らの言葉で受ける権利）を踏みにじるといい、「フラーンデレンにはフラーンデレン語を」と掲げ、言語を基にした地方分権が徹底されたため、“排他的単一言語圏”が新たに誕生したともいえる。だが、その単一性もまた一種の虚構であり、実は、域内にフランス語を話す人々を抱えているのである。

では、オランダ語圏からは一切文学が生まれてこなかったかということ、もちろん、そうではない。ヘンドリック・コンシャンスの『フラーンデレンの獅子』(1838年)のように、異国(フランス!)の圧政に立ち向かい戦いの末に勝利を得るというスタイルの、若い国家ベルギーの愛国心、もしくはその中でオランダ語という言語的アイデンティティを抑えられてしまっている郷土愛に訴える小説もあったが、国外で通じるような文学は生まれてこなかった。その大きな要因の一つには、中等教育がオランダ語で施されるようになったのが1880年代であり、オランダ語での大学教育が実現されるのが1930年である、という背景があげられる。もう一つには、産業が未発展の北部では保守的なカトリック教会が教育において多大な影響力を持ちつづけたという状況がある。実は、1914年に、マーテルリンクの全著作は『青い鳥』もろとも、教会の禁書目録(インデックス)に載せられてしまい敬虔な教徒が読むべきものではないものとなってしまった。つまり、自由に読書に耽り斬新な文学を執筆するということは、神父さんたちはもちろん庶民の間でも危険視された。北部地域の土壌から魅力ある文学運動が生まれてこなかった所以である。同じベルギーでも、北部の文学は自然主義的傾向が強く、社会の底辺をさまよう貧民の困窮を赤裸々に描写するような、象徴主義からほど遠い作品の存在が目立つ。¹³

一点だけ細かいところについて触れたい。さまざまな原著と古い訳に接していると、「Maeterlinck」という名字が「マアテルリンク」「マアテルリンク」とも、あるいは「メーテルリンク」「メイテルリンク」とも表記されるが、正しいのはどちらだろうか。20世紀前半までオランダ語の綴りは、現行のそれと異なる規則が多く、オランダ語の“a”という音をのばすと、今のように“aa”ではなく“ae”と書いていた。したがって、マーテルリンクと発音するのがただし。彼がパリで活躍するようになって、本人がいる場ではただしく発音されたはずである。だが、その名字にある“ae”という二文字は、パリでも、ましてフランス以外の外国で、いつの間にか、ドイツ語風に「エー」と発音されるようになったのではないか。推測であるが、そのようにして、日本で「メーテルリンク」と呼ばれるようになったと考えられる。言い換えれば、ドイツ語やフランス語のような、世界的に通じる列強の言葉の前では、オランダ語のスペルの決まりは、すぐに吹っ飛ばされる軽いものである。ベルギーのすぐとなり、小国中の大国、大国中の小国といわれるオランダ国が位置しても、大きな力にはならなかった。

四 ノーベル賞—求めるは受け、とは限らない

ベルギーに限って言えば、これからしばらくノーベル賞を受賞する作家が現れる可能性は高くない。ただし、その賞が象徴する国際的な関心は「求めて」手に入れるものではない。それは、「分けあって」手に入れるのではなからうか。これが、『青い鳥』の教訓であるともいえる。ベルギー語のノーベル文学賞はすでに出た、ともいえる。ベルギー語は、目に見える言葉ではなく、それは「一国の言語」という正当性の下に眠る、もっと自由な発想の数々をひっくるめて指す総称である。

同じ小国でありながら、多言語国家ではない、隣国のオランダの文学的「牽引力」は、どうだろうか。オランダの人々は数年前に亡くなったハリー・ムリッシュという作家に大きな期待を寄せていた—「ムリッシュこそノーベル賞にふさわしい」、と。なかなかの自信家であり壮言大語をはばからなかったムリッシュ自身もそう思っていたに違いない。だが、北欧からの一声がかからないうちに世を去ったのである。¹⁴ オランダは「商人と牧師」の国であるといわれるが、損得の計算に明け暮れたり、人に説教をしたりすることに生きがいを感じる気風では、個性豊かな文学が花を開く余地が少ない。ここ数年は、アルノン・グルンベルフという作家の活躍がめざましいが、ニューヨークを拠点にしているらしく、それはそれで偶然ではない。世界的にもっとも有名なオランダ語文学—そう呼んでよいのなら—は、アンネ・フランクの日記であるが、周知のとおり、フランクフルトの出身でドイツからアムステルダムへ逃げてきた身であり、大戦の悲しい犠牲になってしまった。最近は何冊ほど、ベルギー北部とオランダを含めたオランダ語圏の小説の翻訳本が出版されているが、けっしておおいはいえない。

ベルギー南部のフランス語圏は、依然として、パリという文化的中心地の求心力がつよい。フランスで成功した作家が日本語に訳される例として、アメリ・ノートンがあげられる。上流階級で生まれ育ったノートンの小説は人気を博しているが、その執筆活動の原動力となるは、外への探求ではなく満ち足りた生活のなかでの「技芸」にとどまっているというように感じられてならない。

ベルギーの文学が日本でもっと広く読まれる日が来るか。それには、蘭仏両言語それぞれの壁を越えるばかりでなく、世界の読者の好奇心をくすぐりその人間性を惹きつける文学があらたに現れるのを待つしかない。「ベルギー語」のベルギー文学。それは、「ベルギー」という国家だけでなく「言語」そのものの虚構性を直視し、21世紀が突きつける現実の複雑性に潜む人間存在の本質を示してくれる、ベルギーという多言語国家ならではの感覚を生かした文学であればこそ、

世界文学に貢献することができる。

有名なベルギー人はいないかと、日本に来てからよく聞かれるが、困ったことに、日本で広く知られる人はあまりいない。さいわい、逃げ道がある。「小便小僧」「ポワロ」「タンタン」「ネロ少年」と答えると、世代によって少し反応が異なるが、四つとも知らないという人は少ない。それらの共通点は何かということ、①ベルギー人であり、②架空の人物である、ということである。お気づきの通り、小便小僧はブリュッセルにある像の名称で、数百年前に実際にいた少年を基にして作られているらしいが、「実在」しているとはいいがたい。ポワロとは、第一次世界大戦のとき、アガサ・クリスティーが自分の村で見たベルギー難民の中にいた男をもとにして作られているらしいが、「実在」しているとはいえない。タンタンは、エルジェという漫画家が創作した漫画の主人公であり、高知の市民図書館にもその和訳本がシリーズごとに置いてあるほど有名だが、けっして「実在」しているのではない。¹⁵ ネロ少年の話ともなると、ベルギーで犬が働かせられていることを知って哀れに思ったイギリスの作家ド・ラ・ラメーが書いた話で、もちろん実話ではない。

これだけ実在しないものがある有名な国は実際に存在するのだろうか。もちろん、存在するが、国家でありながら、その統一性はつねに危機にさらされており、遠くから見ると、少しピントが外れているように見えるかもしれない。人物たちの架空性は、20世紀半ばに絵画などの分野で興隆したシュルレアリスムに呼応するかのよう、ベルギー気質を如実に表していると言えないだろうか。



青い鳥を求めて、それが無い時に恨み節をたたくのは、教養人にふさわしくない。村上春樹の受賞如何にこだわらず、賞を求めないことに読みごたえのある文学がうまれる秘訣があるのではないか。

注

¹ 福田清人著、「百人一首物語」（1974年[1988年：初刊第33刷]、偕成社）156～7頁

- ² 劉曉波氏は、体制を批判する作家として認識されつつ、また中国政府の圧略にもかかわらず2010年の受賞に選ばれたが、その2年後にえらばれた莫言氏は、体制との距離が近く、むしろ文学賞選考委員会が批判を受けてしまう。当時の背景は、日経ビジネス(2012年10月17日付、福島香織著)「賞を必要とする人が受賞したノーベル文学賞」を参考。
- ³ B.アンダーソン著、『想像の共同体』(2007年、書籍工房早山)[初出:1983年];同著、『Under Three Flags』(2007年:Verso)
- ⁴ アレックス・カー『美しき日本の残像』(2000年、朝日新聞出版)
- ⁵ ニューヨークタイムズ紙の次の記事を参照:“Afghan Author Wins French Literary Prize”(2008年11月10日)
- ⁶ グローバリゼーションの一面であるとはいえ、日本語におけるカタカナ語の氾濫(「国民の生活が第一」から「都民ファースト」へ)は、けっして多言語への傾斜として解釈されるべきではない。
- ⁷ 言語警察とは俗称で、正式な名称はケベック州フランス語局である。<https://www.oqlf.gouv.qc.ca/accueil.aspx> 参照
- ⁸ そのほなしも、2008年に重病と診断され意識を失わないうちに自ら命を絶って(安楽死)しまったクラウス氏の死を境にバタリと止まった。日本語には、一冊だけが訳されているようだ。渋沢竜彦訳、『かも狐』(1957年、村山書店)。
- ⁹ ベルギーの言語事情に関しては、いくつもの著書が出版され、それらを参照されたい。ここでは、ベルギーの言語や文学事情にかなりくわしく立ち入る、岩本和子その他編『「ベルギー」とは何か?アイデンティティの多層性』(2015年、松籟社)をすすめた。ベルギー史の一般的な紹介は、村上直久訳『ベルギー史』(1997年、文庫クセジュ、白水社)または、松尾秀哉著『物語 ベルギーの歴史』(2014年、中公新書)に目を通せば基本的な事実関係を抑えることができる。
- ¹⁰ 世界的にもっとも翻訳された小説家の一人である。Index Translationum という、国連経済協力開発機構が提供する、翻訳本検索サイトを参照。<http://www.unesco.org/xtrans/>
- ¹¹ <http://www.nissan.co.jp/MUSEUM/CARNAME/>を閲覧すると、現在生産されている車種を中心に紹介されているが、ブルーバードの命名については触れていない。
- ¹² 国立国会図書館ウェブサイト、<青い鳥>検索
- ¹³ これらについて、三田順「多言語国家ベルギーにおける文学史の諸相—脱構築的視点からみる<ベルギー文学史>の可能性—」『2011年度神戸大学異文化研究交流センター研究報告書』2012年:41~54頁
- ¹⁴ 『天国の発見』という小説は和訳(2005年、バジリコ出版)が出ているが、さらに有名な『De aanslag』(和訳:暗殺)の和訳はない。
- ¹⁵ タンタンの原画1枚が2億円以上で取引されたことに関する記事:<https://news.artnet.com/market/tintin-breaks-1-million-at-sothebys-paris-349364>

(ヨース・ジョエル 高知県立大学准教授)